

# Sj

人とクルマのいい関係をめざして

# 11

2005 NOVEMBER

●編集室：〒351-0188 埼玉県和光市本町8-1  
本田技研工業株式会社  
安全運転普及本部内  
電話 048(452)0304

●編集人：河野光彦

●年間購読料：1200円(定価1部100円・消費税込)

※郵便振替 口座番号：00170-7-173273

※加入者名：(株)アストクリエイティブ  
安全運転普及本部係

## 今月の スポット

地域の方々が協力して、子どもたちや高齢者の交通安全活動に取り組み、そこから地域のコミュニケーションができる。そんなことに私たちがお役に立てればとてうれしい。

(特集より)

### CONTENTS

- 特集：シリーズ教育現場 第4回 ..... ①  
自転車教育の現場—高齢者と小学生の教育現場から  
**しっかりと、安全確認**
- TRAFFIC ADVICE ..... ④  
●企業における交通事故削減のための情報を共有/  
鈴鹿フォーラム・浜松フォーラム報告
- SAFETY REPO ..... ④  
●(株)ホンダクリオ信州/お客様の安全運転意識を高めると同時にHondaの先進技術も体験
- NEWS REVIEW ..... ④  
●(財)交通事故総合分析センター 第8回研究発表会  
●第37回全国白バイ安全運転競技大会  
●活動短信/交通安全教育センター10月
- OPINION ..... ⑤  
●米山和道/子どもの安全安心のために「生きる力を育む」学校教育の推進を
- HOW TO LEAD ..... ⑤  
●月の輪自動車教習所/卒業生対象のライディングスクール
- DOCUMENT EYE (®) ..... ⑥  
●運転中の携帯電話使用状況を観察する(罰則適用から約1年)

シリーズ  
教育現場  
第4回

## 自転車教育の現場—高齢者と小学生の教育現場から

# しっかりと、安全確認

鈴鹿モビリティ研究会<sup>※1</sup>によって、高齢者を対象とした交通安全教育プログラム『あやとりい 長寿編<sup>※2</sup>』が開発され、三重県鈴鹿市からその普及が始まっている。『あやとりい 長寿編』の有効性を教育現場から取材し、紹介するとともに、指導者と受講した高齢者の声から、高齢者への交通安全教育はどうあるべきかを探る。また、企業を定年退職して『あやとりい』を使った地域の交通安全教育にボランティアで貢献するグループの活動を紹介します。



箕田老人会の高齢者を指導するあやとりい同好会のメンバー



箕田老人会の高齢者は自転車の押し歩きからブレーキやバランス、安全確認のトレーニングを行った

※1 鈴鹿モビリティ研究会＝鈴鹿市とHondaが鈴鹿市の将来のより良い交通環境を進めることを目的として1993年に設立され、道路環境の改善や交通安全教育プログラムの開発、教育の実施などを行っている

※2 あやとりい 長寿編＝高齢者対象の歩行者/自転車用の交通安全教育プログラム。少人数制で座学と実技を中心に行い、よくある事故事例に合わせた指導内容で構成しているなどの特長がある。高齢者への重点指導項目としては、道路の「渡るところ」と「渡り方」である。あやとりいは「あんぜんを やさしく とぎあかし りかいして いただく」の略

あやとりい同好会の活動の多くを占めるのは、小学生を対象にした自転車教室



9月28日、三重県鈴鹿市立箕田小学校サグラウンドで、箕田老人会のみなさんが参加する自転車教室が行われた。開始1時間前の午後1時、運営の指揮をとる鈴鹿モビリティ研究会の相浦和則主任が、コース設定のため、前夜からの雨で消えてしまったライン引きを始めた。それを、自分の店でも安全運転講習会を行っている市内の自転車店経営、堀内正さんが手伝う。

コース設定が進む中、今日の指導にあたる、あやとりい同好会のメンバーが次々とやって来た。この同好会は、本田技研工業(株)(以下、ホンダ)を定年退職した有志で構成され、ボランティアで幼児から小学生、高齢者などを対象とした交通安全教室で指導を行っている。この日の講師を担当するのは内藤照男さん、佐脇且紀さん、太田征夫さん、田端春生さん、川田吉昭さんの5名。

箕田老人会のみなさんが、自転車で集まってきた。今日の参加者は男性7名、女性8名。自転車教室は鈴鹿市の要請で始めたもので、老人会などを中心に開催されている。相浦さんの「正しい自転車の乗り方をもう一度おさらいしましょう」という挨拶で自転車教室がスタート。今日のプログラムは押し歩きトレーニング、ブレーキ、バランス、安全確認の4つ。まず最初に、自転車は左側通行であること、歩道は自転車通行可のところのみ走行できることを確認する。そして、いざという時に手が動くように指体操。続いて自転車の装備点検。左右のブレーキがきちんと効くかチェックする。さらに、サドルに座ってみて両足のかかどがつくかどうかのチェック。サドルに腰掛けるのに、時間のかかる高齢者はバランスを崩さないよう、講師が自転車を押さえる。中には、孫のおさぎりの自転車なのだろうか、つま先が着くのがやっとなという高齢者もいる。「これじゃあ、高いね」と、サドルの高さを調整していく。

相浦さんは高齢者の自転車教室では、まず「乗ること」よりも「自転車の点検・大きさ」に注意するという。特に大きさは、孫のおさぎりであったり、若い時の自分の身長を参考にして自転車を選



写真左/ブレーキの練習で高齢者に優しく声をかけるあやとり同好会のメンバー  
写真下/自転車の押し歩きのトレーニングを行う高齢者



長さ7mの直線の上に沿って、自転車を押し、端まで行ったら自転車をバックさせる。「自転車をまっすぐバックしよう」とい

ぶために、サイズの大きいものに乗っている人が多い。サイズが大きいと重たいので小回りがきかない。実際に、1まわり小さい自転車に乗ってもらおうと乗りやすくなることを実感してもらえ。また、大きい自転車だと足が着かないので、止まるのが嫌になってしまい、安全確認が疎かになってしまっそうだ。

# 交通安全活動の取り組みから、地域のコミュニケーションをつくっていく

## 横断歩道では高齢者は自転車を押しして渡るのが安全

全員が全てのコースを体験し、自転車教室が終了した。仲間同士でお

線で止まれるようにブレーキをかけてください。ちゃんと止まれば、道路が見えるところまで少し出ます。そして、右、左、右を見てください。大丈夫なら、後方を確認してください。「後ろを確認しようとしても、首が後ろに回らんからよう見えん」という男性に「大きい動作で結構ですよ。体も顔も曲げて、見てください。そして、できるだけ左に寄ってください」と、講師は優しく心づける。自転車に乗ったままで安全確認がしづらい人には降りるように促し、その際はブレーキをきちんとかけておくようにとアドバイスを加える。

高齢者に、「簡単そうに見える、なかなか難しいでしょう」と講師が一人ひとりに声をかけていく。  
押し歩きトレーニングを終えると、ブレーキの練習。後方の安全を確認して、発進。コースの終わりでブレーキをかけて停止。なかなかスムーズに止まらずに停止線を越えてしまう人が多い。「ブレーキは早めでもなく、ぴったりに止められるよう、練習しましょう」。

しゃべりをしながら帰り支度を始める参加者に、初めての体験という自転車教室の感想を聞く。老人会会長の杉本明さん(80)は「今日は左右確認と後方確認の大切さを学んだ」という。こうしたことは、みなさんが共通してあげているところだ。病院の駐車場でバックしてきたクルマに自転車のハンドルがぶつかって転倒したことがある杉本あつ子さん(78)は、「今日教わった安全確認で、転倒した体験も踏まえて絶対に「右見て、左見て」とやらないとダメだと思いましたが」と、改めて安全確認の大切さを再認識したようだ。参加者のなかでは若手ともいえる杉本敏彦さん(68)は、「最近、交差点で周りに気をつけていても、確認が疎かになる。年齢と共に、識別の判断も鈍くなっている」と感じている。「後方確認の大切さを教わったが、若い時のように思うように後ろに首がまわらない。自転車は後ろから来る人が本当にわからない。クルマに乗っている時の経験でバックミラーを自転車に取り付け、後ろを確認するようにして、安全に気をつけています」と、安全対策を語る。

この日のプログラムでみなさんが口をそろえて難しいといったのがバランス。「バランスコースでは急なカーブは曲がれないことを体験しました」とは杉本敏彦さん。買い物で毎日のように自転車に乗っている今井朝子さん(80)も、「一番大変だったのはバランスコース」と振り返る。「あんなことをやったのは初めてだし、狭い所を通るのは本当に難しいですね。それでも、ブレーキをしっかりかける練習ができたのは良かったです。それから交差点で必ず止まることが大事だとわかりました。しっかりと止まって、左右の確認をする。今日からそうしようと思います」と、元氣な答えが返ってきた。

## もう一つの高齢者教育— 歩行者教育としての『あやとりい 長寿編』

鈴鹿市を中心として、三重県では自転車教育だけではなく、高齢者の歩行者としての交通安全教育『あやとりい 長寿編』が展開されている。9月19日(敬老の日)にも『あやとりい 長寿編』を使用した講習会が開催された。午前11時、鈴鹿市大池老人クラブ楽天会の会員約30名が大池町の集会場に集まった。鈴鹿市の交通教育指導員である中村美穂子さんと鈴木さとみさんの二人が、まず腹話術で、全国的に高齢者の交通事故が増加していること、などを説明する。

そして、鈴鹿市大池町の地図を大きくボードに貼り、「みなさんが住んでいるところ。ここが集会場。今日、クルマでいらっしゃった方は?歩いて来られた方は?自転車の方は?」と尋ねる。さらに、写真を取り出して、「これが牧田保育所のあたり。高齢者の方の事故が多い場所です」。今度はショッピングセンターの写真を取り出し、「ここも、みな



腹話術や地元の地図を使い、高齢者の関心を集める

さんがよく利用される場所です。高齢者の方の事故は、駐車場の中でも多く発生しています。この日はタマゴが安売りの日です。『何で自分までついていかなあかんねん』とお父さんがお母さんとやって来ました。二人はクルマを降りて駐車場を歩いています。そこに、ブーとクルマが入ってきます。タマゴを早く買うことに気をとられていると、ブーと入って来たクルマと事故にあいます。では、どうすれば事故は防げるのか?

「①歩く時にはしっかりと歩く。手を振りながら、バランスをとってリズム良く。②次に、しっかりと止まる。交通安全で一番大切なこと。『止まれ』の標識があれば、きちんと止まりましょう。③そして、見る、聞く。ぼんやり歩かず、ちゃんと見る。クルマの音も聞きましょう。④最後に、道路を横断する時は左右に気を配り、渡る。この4つが歩く時の約束です。」

次は、夕暮れ時の事故防止について。「みなさんは、いろいろな服を着ています。昼間、目立つ色は?」との問いに、「赤」「黄色」と高齢者たち。「でも、周囲が暗くなると赤はわかりません。夜間、外出する時は白や黄色の服装にしましょう。そして、反射材など光るものを身につけましょう。自分を目立たせ、いつまでも自分の命を守るようにしてください」と、交通教育指導員が締めくくった。



交通事故から自分の身を守るために必要なことを高齢者に伝える

受講した林しげ子さんは「ショッピングセンターの駐車場でクルマと人がぶつかりそうになって、『危ない』と思うシーンをよく見かけます。私も助手席に乗っている時、歩行者は見えにくい。今日の話を聞いて、自分も歩行者として気をつけたい」と感想を話す。大池町自治会長の成田守弘さんは、「毎年、定期的に交通安全のことは老人クラブで取り上げています。子どもたちが学校で交通安全を学ぶように、高齢者にもこのような教育を受ける必要があります」と語る。

『あやとりい 長寿編』は地域に根ざして、広がりを見せている。



『あやとりい 長寿編』指導マニュアル

は乗るのに時間がかかる方もあるので、押し渡すのが速く、安全に渡れるからだ。「また、足の力が弱っていて発進時に踏み込めないために、片足をペダルに乗せて、もう片方の足で地面を蹴って勢いを付けて乗る方がいますが、これも危ないので、押し渡してもらいたい。道路の横断に関しては、クルマが来るか見る前に横断歩道以外を渡らずに、少し遠回りでも横断歩道で

シリーズ・教育現場 第4回 「自転車教育の現場——高齢者と小学生の教育現場から」

渡ってください、と言います。事故に遭いやすい道路の横断が、高齢者の自転車における最大のポイントである。

老人会会長の杉本明さんは、「老人会の会員も自転車を利用する機会が多い。年に2回はこのような自転車教室をこれからも継続していきたい」と、定期開催の考えを示した。

ホンダDOBが交通安全で地域に貢献

指導を担当したあやとりい同好会(以下、同好会)は現在34名。5つのグループに分かれて、『あやとりい自転車教室』で指導にあたっている。活動のきっかけは昨年2月、鈴鹿市立牧田小学校で、卒業を間近に控えた6年生を対象に、自転車の乗り方教育を行ったことに始まる。進学する中学校での自転車通学に向けた実際の通学路における自転車の乗り方教育に、ホンダを定年退職したOBたちの組織であるホンダ倶楽部の有志が協力した。昨年4月から正式に同好会として発足。幼稚園、保育園、小学校、老人会などを対象とする交通安全講習のボランティア指導員として、5つのグループが交代で、多い時期には1人が週に2〜3日、活動しているそうだ。

こうした活動が評価され、11月5日に鈴鹿市より同好会が表彰された。

同好会のリーダーの1人である内藤照男さんは、同好会は地域への貢献を考えて設けたという。「私たちが働いている間、地域に随分とお世話になったので、何か地域のためにできることはないか、と考えたのです。そうはいっても、地域貢献を何から始めたら良いかわからず、まずはゴミ拾いを始めました。そんな時、鈴鹿モビリティ研究会が鈴鹿市の要請で自転車教室を行っているが、人手が足りないという話を聞いたのです。ホンダに勤めていた人間が交通安全のことで地域に貢献できるなら、なおいいではないか、ということと同好会が発足しました。」

同好会のメンバーには、すでにさまざまなボランティア活動をしている人もいます。田端春生さんは、社会活動推進センターでヒヤリ地図づくりをしたり、道に落ちてい

る木や木の葉、貝殻、石、廃材などをワゴンに乗せて環境の大切さを子どもに知ってもらう「環境わごん」という活動にも参加している。「これらの活動の根っこにあるのは、子どもが好き、モノ作りが好きということですね。自分の好きなもののために役立つ、という志が今の私の原動力です。そして何より、子どもと話をするのが楽しい。退職してからも、こういったさまざまな活動を通じて多くの人と関わることができるのも大きな喜びです」という。

佐脇日紀さんは、内藤さんらの呼びかけにすぐに応じた1人だ。「私自身、在職中から安全意識が高かったほうだと思います。だからすぐに、交通安全活動を通して地域のためにできることをやろうという同好会の主旨に賛同しました。高齢者の方に教えるのは、私は今日が初めてです。今まで教えてきた子どもと比べて、や



はり高齢者の方は時間をかけてゆっくりと練習していただくことが大事ですね。一方、今回が3回目の太田征夫さんは、「高齢者の方に教える時に気をつけていることは、子どもと比べて動作が俊敏ではないので、それに合わせることです。特に女性はなかなか乗れない方もいらっしゃいますし、ブレーキもすぐにかけられない方も多いため、高年齢の方には敬意をもって一歩下がった態度で接するようにしています」と、高齢者への心がまえを語る。川田吉昭さんは、昨年8月に、ホンダを定年退職し、地域のためになるなら同好会に参加。「今年11月からの本格的な『あやとりい』長寿編』始動に向けて、今日初めて高齢者の方への指導をさせていただきましたが、人生の先輩である年上の方に受け入れていただける話し方ができました。新聞で見たのですが、『若者しかるな昔来た道、年寄り笑うないずれ行く道』、この言葉を肝に銘じて高齢者の方に接しています」と語る。

子どもたちの反応が活動の支えに

同好会の活動の多くを占めるのが小学生対象の自転車教室だ。10月11日、牧田小学校の親子自転車教室には同好会から5名を派遣。これは、3・4時限の総合学習の時間に3年生の学年行事として開催したもので、3年生78名と親など保護者37名が参加した。当日はあいにくの雨模様のため体育館での実施となった。指導にあたったのは、鈴鹿モビリティ研究会と、鈴鹿市の交通安全教

育指導員2名、同好会の5名、鈴鹿市交通安全協会の1名という体制だ。この日のプログラムは、相浦さんの挨拶に始まり、交通安全指導員による豆腐と卵をヘルメットの中に入れて落下させる実験、交通安全クイズ、壇上の筒からおもちのカメラレオンを落とす実験、反射神経を知る実験、子どもたちが作ったチャイルドビジョン(幼児視界体験メガネ)を使用して全員で校舎内を歩く実験、そして体育館内に設けられたコースを使った自転車の実技。自転車の実技では、親はチャイルドビジョンを使用して走る。ゴールした父親は、180度の視野が90度になった感じ

写真上/雨のため牧田小学校の親子自転車教室は体育館内で行われた  
写真右/あやとりい同好会のメンバーは学年によって教え方を変えているという  
写真下/チャイルドビジョンを使用して、子どもの視界を体験する保護者

で、校舎内を歩いた時より、自転車で走った時のほうがさらに怖いと、チャイルドビジョンをはずしてほっとした表情で話す。「これだと、きちんと首を回さないと後ろは見えないことがよく分かりました。仕事でも運転していますので、子どもたちの視野が大人より狭く、よく見えていないことを頭に入れて注意しないといけないと思いましたね」。ある母親は、自転車教室は初めての体験という。「このメガネを付けると、横がほとんど見えません。子どもはクルマを見ているかと思っても、見えていないのだとわかったので、自転車外に出る時に、しっかりと左右を見るのよと注意できました」。ゴール地点で戻ってきた自転車の誘導をしているのは同好会のリーダーの1人、竹富健一さんだ。子どもたちを笑顔で迎える。「ゆっくり、ゆっくり、はい、こっちはよくできたね」と声をかける。近くでふざけて、コースにはみ出してくる子どもには、厳しく注意もする。「親がこうした講習に参加する機会ほとんどありませんから、自転車のルールも知らずに乗っている方もいます。今日のように子どもだけでなく、親も一緒に教えると、子どもを守るという目で交通安全やルールを考えてくれるようになると思います」というのは、止まれるの標識のところで、左右後方の確認を指導していた同好会メンバーの加城昭利さん。「小学生でも5、6年生になると、練習の時、『右、左、右、後ろを見る』と声に出すことは恥ずかしくてやらなくなる。学年によって教え方や、注意の仕方を変えるよう

にしています。特に女の子には気をつけて話さない、変なおじさんという顔をされますから」と、苦笑い。高齢者とはまた違った苦労があるようだ。「この地域の事故が去年より1件でも2件でも減っているのと、少しは役に立ったのかなと思えるのが励みです」と話す。

自転車教室が終了して閉会すると、子どもたちが講師に「またお願いします」と握手しに駆け寄ってくる。5人の講師に満面の笑みが浮かぶ。竹富さんは、「真夏の太陽が照りつけている時など校庭で2時間立っていると、さすがに体にこたえますが、終わった時の子どもたちの笑顔と握手で、またやろうという気持ちになり、元気になれます」と、うれしそうに話している。また、「教えてくれたり、名前を覚えてくれるとやる気が出ます」とは阪本洋明さん。子どもたちの反応が活動の支えになっているという。「外で子どもを見たら、お帰り、いつてらっしゃい、と自然に声をかけられるようになりました。5人の講師が口をそろえて、同好会の活動を始めてから、知らない子どもにも挨拶するようになった、それがうれしいという。「見知らぬ人に声をかけられたら、逃げなさいといわれる世の中になっっているなかで、地域の方々が協力して、子どもたちや高齢者の交通安全活動に取り組み、そこから地域のコミュニケーションができる。そんなことに私たちがお役に立てればとてもうれしい」。竹富さんの話から、地域での交通安全活動が、地域の人々の関係をよりよくしていくという可能性が見えてくる。

交通安全教育プログラム 『あやとりい』

『あやとりい』は鈴鹿モビリティ研究会が、小学3、4年生を対象に開発した交通安全教育プログラム。その経験を活かして、『自転車編』や幼稚園児向けの『ひよこ編』も開発されている。『あやとりい』の詳細については、下記ホームページでご覧いただけます。<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/>

※3 チャイルドビジョン(幼児視界体験メガネ)は <http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/partner/> からダウンロードしていただけます。